

# Nara Women's University

【博士論文本文の要約】 仮名文学の誕生と「やまと」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-05-20 キーワード (Ja): 「やまと」, 仮名文学, 平安時代, 歴史学 キーワード (En): 作成者: 長田,明日華 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/5799">http://hdl.handle.net/10935/5799</a>

## 博士学位論文要約

仮名文学の誕生と「やまと」

2022年1月

奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科

博士後期課程比較文化学専攻

長田明日華

人は、ことばを話して他者と思いを伝え合い、コミュニケーションをとっている。人と人の関係が築かれ、社会が成り立つ根底には、ことばが大きな役割を果たしているといえよう。また、ことばは文字によって書き出すことができ、現代日本では漢字・仮名が自由自在に用いられている。過去に遡ると、平安時代に仮名文字が成立し、漢詩文などの漢文学に加えて、和歌や物語などの仮名文学が多くつくられるようになった。漢字に限らず、人が話すことばをそのまま一字一音で書き出すことのできる仮名を用いはじめたこの時期は、現在の社会を捉える上でも注目すべき画期にあたる。

では、仮名の成立はいかなる意味で歴史的な出来事といえるのであろうか。この問いを考えるにあたり、本稿では平安時代に仮名を用いた文学作品が多く書かれはじめたことに注目した。新たな表現方法でそれまでにない内容を書くという出来事は、単に書きたいことを書くための文字が増えたという問題ではなく、文字やそれによって書きあらわされることばに対する人々の価値観に、何らかの変化が起きていたことのあらわれではないかと考えられるためである。具体的には、仮名の成立・展開期にあたる9～11世紀に書かれた文学作品を主な考察の対象として、なぜ新たに仮名で文学作品が書かれはじめたのかを問い、ことばに対する認識の変化のもつ歴史的意義に迫ることを目的とした。

現在の歴史学において、平安時代史研究で用いられるのは主に漢文史料である。それらから得られた歴史像との兼ね合いで仮名文学が検討されることはあっても、本稿のような問題意識に基づき、仮名文学に内在する思想から歴史像を立ちあげる研究はほとんどみられない。しかし、研究史を遡ると、1943年に石母田正氏が『うつほ物語』を「頽廃し腐朽しつつある貴族社会の叙事詩」と捉え、古代末期の時代精神が表現された作品として位置づけ、古代から中世への転換を文学史から描き出すことを試みている。氏の文学史研究では、史的唯物論から得た歴史像の単なる反映を文学作品に見いだすのではなく、文学史を通して精神的な面から新しい歴史像を描き出し、より豊かに歴史を捉えることが目指されていた。

氏の文学作品をめぐる方法論はほとんど顧みられなかったものの、そこから得られた歴史像は1950年代の現実的な課題である民族の問題として受け止められる。『うつほ物語』に表現された古代末期の時代精神は、「民族文化」としての「国風文化」論として、川崎庸之氏や河音能平氏に継承され、歴史の転換の問題として研究が進められた。

ただし、その後の「国風文化」論では「国風」と「民族」を結びつける視点を相対化する方向へと展開し、「国風文化」を歴史の転換として捉えようとする意識は後退する。また、文学作品を素材とする歴史研究自体は次第に数を増しているものの、石母田氏が提起した、文学作品から時代精神を読み取り歴史に位置づける方法それ自体は顧みられていない。後の研究がこのような方向に展開した要因は、石母田氏の研究そのものにあると考える。氏は、作品の記述から作品像・歴史像を構築する方法を目指していたものの、実際は史的唯物論に基づき階級闘争による歴史像を前提として考察せざるを得なかったという、研究上の制約・限界が存在していた。氏が本来目指していた方法を貫き通せていなかったために、後に文学史をめぐる方法論の批判的検討がなされてこなかったのではなかろうか。

本稿では、氏の研究方法に立ち返りつつも、それとは異なる歴史像を描き出すことを目指した。もっとも、氏が提示した平安時代像はその後の研究で見直されている。しかし、文学作品から歴史像を立ちあげた上での批判ではなく、主に政治や経済をめぐる変化のどこに画期を見いだすのかという点に議論が集中している。そのため、文学作品から時代精神を問い、氏とは異なる歴史像を描き出すことができれば、従来の「国風文化」論や平安時代論を問い直すことにも繋がると考え、考察の出発点とした。

第1章「うつほ物語の〈声〉」では、『うつほ物語』に繰り返し表現されている饗宴・音楽の場面における楽器や人の「声」に注目し、身分を問わずにあらゆる人々が共感するさまが表現されていることを明らかにした。さらに、身の上話という誰もが日常的に話し仮名を用いて一字一音で書き出すことのできることばにおいても、「声」と同様の共感が成り立っている。ことばの意味を理解することによって身分を問わずに人々が共感することが社会に求められ、その共感のありようを表現するなかで『うつほ物語』が成立したのである。

第2章「仮名日記の成立」では『土佐日記』と、その作者である紀貫之が執筆したという『古今和歌集』仮名序を、真名序と対照しつつ検討した。『土佐日記』には、誰もが日常的に話すことばに近い和歌によって表出される「心」を基盤にして、身分を問わずに共感が成り立つ社会が表現されている。『古今和歌集』によると、本来和歌によって君臣が「情」を通わせることで「民の欲」にもこたえていたように、和歌を詠み共感を成り立たせることは統治者層にこそ求められていた。しかし、『土佐日記』において和歌は身分の高い人ばかりが詠むのではなく、誰もが日常的に話すことばに近いと、和歌の素養のない者まで詠み得るものとして位置づけられている。君臣が意識的に通わす「情」ばかりではなく、「民」が日常的に話すことばによって表出する「欲」であっても、三十一字という形式をとることで和歌になり、共感が成り立ち得るのである。『うつほ物語』に、身の上話に対して皆が共感する話がかかれていたのは、誰もが身分を問わずに日常的に話すことばによって表出される「心」が広く共感の対象になると考えられていたためではなかろうか。仮名文学の成立期には、誰もが日常的に話すことばによって「心」を表出し、それに共感が成り立つという意識のもとで人と人の関係を成り立たせることが社会に求められていた。そのような共感の成り立つ社会のありようが、草創期の仮名文学に表現されていたのである。

第3章「詩・申文・物語——平安期の漢文学と仮名文学」では、仮名文学の成立と同時期につくられていた漢文学に考察の視点を移した。9世紀前半に多く詠まれた君臣唱和詩は、君臣の思いが容易に通じ合うという意識のもとで詠まれている。しかし9世紀後半になると、君主であっても臣下の思いを捉えそこねるという意識があらわれはじめ、10世紀後半には愁いのある臣下が自ら身の上を訴える申文が多くつくられるようになる。容易に思いを通じ合わせる人間関係がもはや成り立たず、人それぞれ異なり他者からうかがい知ることのできない思いをすくい取ろうとする意識の転換が起きていた。同時期の仮名物語においても、申文と同様の内容を口に出し、それを聞いたあらゆる人々が共感するさまが表現されている。愁いの「心」は、漢字・漢文、仮名・仮名文を問わず表現されることから、この時期の漢文学と仮名文学には、人々の多様な「心」を認めることで成り立つ人間関係をもとに、新たな社会関係をつくり出していこうとする意識が通底していたと考えられる。

第4章『『やまと』と延喜・天曆聖代観』では、仮名・仮名文という、ことばを介した共感がいかにして成り立つと考えられていたのかを問い、身分を問わずに人々が共有する過去として「やまと」が再構成されていたことを明らかにした。同時期の漢字・漢文においても、容易に思いの通じ合う関係がもはや成り立たず、人それぞれ異なることを前提とした関係を成り立たせるべく、共感を支える過去として新たに延喜・天曆期が形成された。さらに、仮名文学で語られる「やまと」の起点は、10世紀前半は「なら」であったのに対して、11世紀にかけて「やまと」が再構成された時期そのものという、まさしく延喜・天曆期に通じる過去に結びつけられていく。漢字・漢文、仮名・仮名文のことばを介した共感を成り立たせる過去は、延喜・天曆聖代観に連なる過去として重なり合っていくかのように展開したのである。これは、身分を問わない範囲と統治者層との間で同じ過去を共有することによる、ことばを介した共感が求められていたことのあらわれではなかろうか。そこには、後の時代にかけて社会に広がっていく漢字・仮名交じり文を導き出す、新たな価値観が形成されはじめていたと考えられる。

付論「熊野御幸と和歌」では、仮名文学に表現された思想が後にかけていかに展開したのかを問う手がかりとして、仮名文学の草創期とはじまりの時期が重なる上皇の熊野御幸に注目した。仮名文学誕生の根底にある、多様な人々の「心」をすくい取り秩序を成り立たせようとする思想には限界があり、その矛盾が鎌倉時代にかけてあらわれていると述べた。

終章では、ことばによる共感を支える過去として形成された延喜・天曆聖代観や、漢字・仮名交じり文の使用が近代のはじまりまで残り続けることに注目し、同じ過去を媒介して「心」をことばにすることで多様な人と人の中に共感が成り立ち、それをもとに社会秩序を成り立たせていこうとする意識は、後の時代にかけても必要とされ続ける価値観であった可能性を指摘した。仮名文学誕生の歴史的意義は、誰もが漢字・仮名交じり文を用いて自由にことばを書き出せることにも繋がっていく、ことばによって成り立つ人と人の関係や、社会のあり方に対する思想が表現されていることにあると考えられる。この点をふまえて石母田氏の研究に立ち返ると、氏がかつて時代の転換に立ちあらわれる主体性が文学作品に

表現されないことを日本古代の精神構造の特徴として捉えていたのに対して、本稿では後代に残り続ける人間が立ちあらわれるという、歴史的な転換とかかわる人間に対する認識が平安時代中期に形成されはじめ、それをめぐる思想が文学作品にあらわれていたと結論づけた。

以上のような、同じ過去を共有し一人一人異なる「心」をもつという人間に対する認識の変化は、文学作品を検討することによって明らかになったものである。従来の歴史学において、平安時代中期は律令国家の政治構造をはじめ、貴族社会の内部や都と地方などの諸関係が変化する時期であるといわれている。本稿の考察をふまえると、文学作品にあらわれていた人間に対する認識の変化が、諸関係の変化を支えていた可能性があるのではなかろうか。その意味で、文学作品に内在する思想は当該期の社会変化の根底にある思想とも通じていると考えられることを指摘し、このような視点からさらに検討することを今後の課題とした。